

その後一九九〇年

ジョン・ケアリ著^[1]
朝倉秀之訳

この本^[2]が、最初に出版されてから数年間、大学の文学部の主要な論争点は、文学研究における「理論」という領域であり、文学を教えることに必要な考慮すべき重要事項としての「理論」と「歴史」という対峙する主張でもあった。たまたま、トーマス・ダハティとアーサー・マロツティ^[1]が書いたダンに関する最近の二冊の本が、この問題について反対の立場を取り上げている。この二冊の本を使つて対峙する観点の長所と短所のいくつかを明確にしてみよう。

ダハティの本は、彼が日頃考えている「大雑把で、時として全ての事象を単純な概念にしてしまう」ダンに関する以前の読みを修正するものとして問題提起をしている。彼自身の研究方法の優れているところは、彼が考えるように「集中的にポスト構造主義理論に注目させたこと」にある。その理論によつて、彼は初期の批評家たちの過ち、特に、ダンの詩と他の作品を読めば、ダンの意味、思想、あるいは着想の特徴が理解できるという彼らの間違つた仮説を避けることができた、ということである。

ダハティは、このように理解できることを否定する。この否定が、彼の理論的立場の基礎であり、しばしば、彼の本を通じてなんとか

繰り返される。このように、彼は、自分の研究方法がダンに関する「ヒューマニズム」批評を無効にする、と主張する。その理由は「少なくともその批評の様式が、同一性、権威、意味を、個人的な（ダン）その人であるとする一つの纏まつた意識にしてしまふからである」（ダハティの本の六十頁）という。すなわち、彼は、ダンの信条や「独特であるとか、个性的であるとかいう（彼の着想の構造）」（同百三十頁）を発見するためのどんな企ても、間違つた方向に導くものとして退ける。彼が当然だと見ているのは、ダンの書いた物（同百二十七頁）などを通して、私たちが単純にダンという人物を理解するのではない、ということである。

この明快な表現の中でのダハティの理論的姿勢は、現代文学批評の大方の読者には、かなり馴染みのことであろう。その根拠として、ポスト構造主義理論に最も有名かつ影響を及ぼした貢献作品の一冊を引用する。（同百七十七頁）それがロラン・バルトの知恵比べの本、『作者の死』^[2]である。しかしながら、その一般的立場が、いくら馴染みのあるものだとしても、西洋思想の宗教的伝統におけるその結びつきが、いつも認識されるとは限らない。さらに、その立場の意味するところは、広範囲に渡ることになり、それが応用される独

断的主張の度合いにもよるからである。これら両者の論点は、少なくとも熟考に値する。

本質的にポスト構造主義の立場は、ダハティが理解したように、肉体と魂、肉と霊との間の正当なキリスト教＝プラント哲学の区分の発展である。この区分によって、霊の領域は肉から離れていて、相容れないのが公理となっている。「見えるもの」と見えない永遠の真理との間には一致点はない。例えば、私たちが他の人々と会うとき、外面の身振り（見えるもの）だけを理解するから、どんな確実性があるろうとも、その身振りの内なる姿を理解することはできない。キリスト者の間で、このように認識することで、伝統的に人間の知識の限界と人間の判断の危うさが強調されるようになった。「誰しも正しく他人を咎めたり、罰したりすることはできない」とダンの若き同時代人トーマス・ブラウン卿は『医師の宗教』の中で述べている。「なぜなら、実際のところ、誰も他人を本当には知らないのだから」。

この立場はいつも「ありきたりの命題」の縁を彷徨うことになる。本質的で知ることのできない内なる現実（魂）の存在が、定義によって全く物質世界から区分されるのは当然であるからである。一度この仮説が作られてしまうと（そしてもちろん、それが反論できないとすると）見えるもの（記号、ことば）が正確に見えないもの（魂、意識、意味）を決して正確に表すことができないという主張が自明の理となる。ダハティはこの自明の理の言い換えをしているのである。その自明の理は、その用語を使うことで、その宗教神秘主義の起源に注意を引きつける。そのとき、彼は「霊の存在や空想の言葉を具体化したり、あえて文字通り明確に表すことが、霊の存在や言葉の消失、それを誤って伝えることに等しいことになる」（同百四十三頁）と書くのである。

この自明の理を正当化するために展開できる批評の実際は、わたしが述べて来たように多種多様である。その意味や構造を直接に理解することが禁じられているという点では、その自明の理は、明らかに不確かな作者の意味やその着想の構造についての推論を、伝えることになる。このような推論は、じゅうぶん議論の余地はある。立証できることと言えば、多分そうであろうという確率だけである。しかし、最も素朴な批評家たちだけは、中身がそうではないことを絶えず想像してきたはずである。トーマス・ブラウン卿が認識したように、人類の知恵に関して言えば、確かなことは、概して役に立たないと思われてきた。このことが、他の人々を理解したり、他の人々と意志の疎通を計ったりするあらゆる試みを宙ぶらりんしておくための理由としては受け入れられないし、いままでも通常は受け入れられて来なかったのである。

その証拠に、批評家たちが作者の意味を、書かれたテキストから推し量ろうとするのを邪魔する理由などないのである。このようないかなる推論も不可能だ、と断言し続ける批評家なら、一貫性を持たせるために、自分に送られたどんな書類（自分の雇い主であろうと、自分の弁護士からの文書であろうと）の意味も理解する能力など無いのです、と前もって言わなくてはならないだろう。このことは、自分自身が自分の仕事をこなせないと宣言するのに等しいことになる。この必然的な結果にもかかわらず、自明の理を教義として応用することは現代批評の議論において珍しくはない。テキスト（見える）から作者（見えない）へと移項することはできないから、テキストに忠実な批評家たちが論ずるように、テキストで認識されたすべての意味はその読者の作品となり、作者のものではないということになる。読者は、実際そのテキストの意味するところを創り出す責任

その後1990年

がある。しかし、その読者は、意味することがその作者のものであるという幻想の下にあるかもしれない。読者は、たった一つの意味の拠り所であるから、歴史上の作者、あるいは作者の同時代の読者たちがおそらく理解していたかもしれない意味を創り出すことに自らを限定すべき理由などない。そうなると、そのテキストが遊びの場、一連の無尽蔵な意味になる。その中で読者は、自らを自由にして連想したり、想像したり出来るのである。これが大雑把に言ってバルトの『S/Z』(一九七〇)³⁾の中で目論まれた状況である。このような立場の欠点は、何か政治的あるいは歴史の意味または、実際に、なんらかの意味を持っている書き物の可能性を、排除することである。意味が、テキストから読者に移項されるからである。

これに対するダハティの反応は、他のいくつかの理論的問題に関して、曖昧模糊として見える。一方で、意味は「ダン」が言うことでも、厳密にはそのテキストが言うことについての問題でさえなく、我々が読者としてそれを引き出すことについての問題なのだ(同四十七頁)、というポスト構造主義の教義を彼は熱心に繰り返すのである。こんなことは、気儘な「遊び」の弁護のように見える。しかし、実際のところ、ダハティは自分の目的が「ダンの書いた物を形成した歴史的文化」の光の下で彼の詩を解釈することにある、と強調する。これは、以前の批評家たちが無視してきた研究方法である、と驚くべきことに彼が信じているのである。(同一頁) 私たちが見るように、ダハティの歴史概念は奇妙ではある。しかし、彼自身が「歴史的」であるとか、そうあることが正しいと宣言することは、明らかに読者が気儘に思うがままに意味を捏造することを排除している。

ダハティの立場のもう一つの問題点は、ダンの「歴史的文化」を

ダハティが再構築するのに彼自身のテキストの読みに頼らなければならぬことである。なぜなら、「歴史」が存在するのはテキストの中だけだからである。ダハティは、明らかにテキストからダンの「歴史的文化」を特徴づけた思想や精神へと溯って読むとき、心の呵責を感じない。これが正しいとすれば、彼がダンの詩から思想や精神へと溯って読むことはできないのだ、という理由が不明瞭である。歴史的文化的な作り上げている思想や憶測がほこりの粒子のように空中に漂っているわけではない。それらは人々の精神の中にある。それゆえに、ダハティの歴史に対する要請は、テキストから精神への変わらない移項を必要としている。彼とダンの自伝的批評家との相違は、一個人の精神よりむしろ一つの「文化」の精神を再構築しようとしているから、彼の研究成果は、うまくいっても不正確になると言うことである。なぜなら、「文化」は人が持つような精神を持つていないからである。いずれにしても、歴史を持ちだしたところで、ダンの自伝的批評家たちを悩ませていると考える解釈的問題から彼自身自由になつてはいない。さらに、これらの批評家たちを公然と非難しているにもかかわらず、彼らの仮説を使っているように思われる。彼らのように、彼は、歴史的テキストが意味を理解することができると決め込んで、その意味は現代の読者が捏造したのではなく、歴史的妥当性があるというのである。

しかしながら、ダハティの本の最も驚くべき、かつ自己矛盾の一面はその範囲である。ダンの意図、意味そして思想を理解するのは不可能だ、と私たちに警告を発してきたにもかかわらず、まるでこのような理解が完全に開かれていくように述べているからである。たとえば、ダンが彼の読者を「支配」し、その読者が「テキストを通してずうっと操られている」(同三十六頁) ことを私たちは確信す

る。テキストを書くという行為そのものがダンにとって「彼自身の個性化された（ことばの力―権威）の探究と確立」（同四十頁）であった。ダンは彼の「陥りやすい犯罪や批判的思い」（同六頁）を隠匿するように「故意に曖昧で、秘密めいたテキスト」を生み出した、というのである。これらの断言はどれも身元が確認できる「ダン」という存在を、証明可能な意図を持って決定するものでなければ、意味をなさない。

ダハティは、同様にダンが女性という主題について理解していたことを詩集から推測する。「アナグラム」の読みは、私たちが知るように「ダンと彼の社会がどのように女性を理解し、伝えたのかについての批評的知識にはきわめて重要」（同六十二頁）である。ダンは「気が変わりやすいとか、当てにならないこと」が「女性の特性であること」を連想し、「女性の怖さ」を感じた。（同六十一頁）推論は同様にダンの宗教的見方についても提示する。ダハティが判断するように「神学的立場に関して、ある躊躇（同二百三十五頁）があったことが、ダンの詩から明確になる。特に彼は、ダンが「化体説の問題に関する宗教改革によらない神学的立場と明確に一致させている」（同二百三十七頁）のを発見する。

もちろん、これらの例証の中で、ダハティの意見が、正しいとか正しくないとかは、問題点ではない。ダンについての彼の推論は受け入れられるように思えるものもあるし、また、ダンが化体説の教義に執着していると断言しているような箇所はいかなる証拠をもつてしても支持されないとある。問題は、このような記述は全て（そしてダハティの本はその羅列であるが）自分自身が採用していると思いついて入っている理論的立場に反している、ということである。それらの記述は、「同一化、権威、意味」をダンのものだとしている。

ところが、ダハティの理論的表明の中では、このようなどんな帰属に対しても手厳しい警告を発するのである。この二つの言い方が示していることは、ダハティの側の理性的な議論がそれほどに出来ないというのではなくて、彼が好きなポスト構造主義批評の教義と、試みようとする文化の歴史みたいなものを組み合わせるといふ解ききたい難問を抱えているからなのである。取りも直さず彼の失敗の好例であり、そのことで、彼の本が全般にわたり警告を受けることになる。

ダンの思想や信条を理解するという彼の対立理論の仮説は、最も熱が籠もる時に出てくるのだが、それはダンのテキストが、ダハティの好む知的歴史観を強固にするように思われる時である。「新しい科学は全てのを疑う」とダンが『第一周年詩』で書くと、そのままダハティは信じてこの句を繰り返す。すなわち「ダンにとつて、その新しい科学は全てのを疑っている。」（同八十八頁）彼のポスト構造主義理論がこんなに簡単にテキストから「ダン」に移項するのを彼に許す筈がないのは、はつきりしている。実際のところ、歴史あるいは自伝的批評の通常の手続きでも、この場合、許さなかつたであろう。わたしが前章で提示してきたように（この本の二百三十四―九頁）、ダンが新しい天文学について様々に観察したことについての比較は、ダン自身の態度が、『第一周年詩』についてダハティが信頼してきた以上に、もっと遙かに複雑であったことを示している。

こんなふうにならばダハティは、私たちを案内して、ダンの「歴史的文化」を再構築するが、歴史的文化的なるものは彼の本の最も不可解な面の一つである。コペルニクスの一五四三年の論文『変革』の出版は、ダハティが主張するようにヨーロッパの人々の意識に深い変革

その後1990年

をもたらした。

天文学思想に於けるコペルニクスの大変革で、地球と人間性に根ざした特権的立場の根本的「入替え」が起こる。中心性と動かぬ確かさは失われ、人間は今や自分自身が宇宙の中で身を誤ったり、彷徨う星のように「流罪」か、「罪過」の状態にあるのを見出す。すなわち時代はすっかり一つの『失樂園』を書く用意が出来ている。

(同八頁)

もちろん、ある程度これはエリザベス朝の世界像の多様性というお馴染みの単純化された文化の歴史を辿っている。しかし、ダハティがあえて主張する極論は普通ではない。右の引用文の中で、人類が一五四三年以後だけ罪過の状態にいたることを見出したという仮説は並外れて無知である。たとえば、その仮説では原罪の教義がなおざりにされている。それはアウグスティヌス以来のキリスト教神学にとつての中心であり、プロテスタント宗教改革によって補強された教えでもある。その原罪によって、エデンの園を追放されて以来、人間の生まれながらの性質はいつも逃れがたく悪へ向かうのである。ダハティは、自分の主張を詳しく述べるために、コペルニクスの結果として、人間が「永遠の真理という仮説の領域」(同八頁)の中でよりむしろ「時代と変革を通して」生き始めたことを論じる。これもまた、全くの幻想のように思える。老年と死が到る所にあるのに、人間は時代と変革を通して生きることにならずと気がつかないでいた、と信じることは難しいし、ダハティはこのような存在の歴史的足跡をハッキリと提示しない。ダハティは、一五四三年に続く

「俗化した時代への転落」であると奇妙にも呼ぶその先の結果は、彼が説明するように、国々は崩壊する傾向にあったし、「市民戦争の衝突が可能性として現れる」(同三十八頁)というのであった。この論述もまた、途方に暮れさせる。ダハティは、一五四三年以前、市民戦争が無かったことなどほとんど想像することができないのである。しかし、市民戦争はたくさんあるので、彼が記述している意味が、理解できないことになる。

彼の歴史的仮説は大部分支持し難いので、その仮説にダンの詩を合わせようとする作業は、ある種の歪みの中にダンを押し込めてしまふ。たとえば、彼がコペルニクスの発見に言及する大変革の効果は『日の出』の中の証拠であると、ダハティはいう。この詩は、宇宙の中で太陽が「中心」であるというコペルニクス理論の実証についてである、と彼は主張する。恋人たちは「太陽として同じ中心の位置を占める」(同三十一―三十一頁)このどれもが真実であるとは思えない。真実、その詩の話し手は、太陽が動いて、その「動き」(四行)にはつきりと言及するのを当然のことだと思っている。恋人たちは太陽として同じ「中心の位置」を占めてはいない。なぜなら太陽が全く中心の位置を占めていないからである。太陽は恋人たちの回りを廻るようにと招かれているのである。

ここで僕たちを照らしてくれ、お前は到る所に存在する。

このベッドはお前の中心、四方の壁はお前の天球なのだから。

(二十九―三十行)

この詩行によって、ベッドが太陽の中心となり、寝室の壁はその軌道となるであろう。だから、詩の中の太陽は、コペルニクス以前の

宇宙の中でのように、中心を囲む天球の中で廻りながら、動いているものとして、一貫して考えられている。太陽中心の天文学の詩の中に暗示など何もない。一つの証拠として、ダンの「歴史的文化」を理解するなら、『日の出』はダハティが必要とするものと全く正反対の機能を満たすことになる。

ダンの「歴史的文化」を形成している第二の主要な要素は、ダハティが論ずるように望遠鏡の出現だった。

望遠鏡を実際に使うことで、手と目を入れ換えることとなつた。物が存在する事実を触って検証する代わりに目で検証する。(それゆえデイズデモナーの不実を示す「視覚の証拠」のためにオセローが要求する適切さ)

(同五十三頁)

これもまた、大変奇妙な主張である。人間のどの働きの中で、目で検証することが初期十七世紀に触って検証することから引き継いだというのか。ダハティは何も引用しない。天文学が明確に資格を与えるのではない。なぜなら、それは触って検証することに全く影響されることは無かつたからである。星を触ることなどできないのだ。望遠鏡は単に光を利用しての検証をもっと正確にしただけである。同じことは生物学についてもいえる。ここでは顕微鏡の出現によって、裸眼で間に合っていた以上にもっと近づいて標本に光を利用して検証することが出来るようになった。ダハティが断言する意識の主要な変化は、実際起こつたようにには思われない。オセローへの彼の言及は明らかに的はずれである。オセローが妻の罪を信じないうちに妻が姦通するのを見るべきであると要求するのは、望遠鏡時代

以前においても、完全に理解できることであろう。望遠鏡以前のオセローなら妻が姦通をしている間に、代わって妻を触っていたかつたであろうとするダハティの意味するところは奇妙な考察である。

ダハティによると(同五十三―七頁)、ダンの中で望遠鏡以前から望遠鏡以後への意識の変化を最も明確に表している詩が『蚤』である、という。確かに可能性のあることで、ダンがこの詩を書くまえに、遠くの物よりむしろ小さい物を見るために、望遠鏡が顕微鏡として使われるかもしれないという考えに思い到つたということである。ダンの友人トーマス・ハリオットは、少なくとも天文学上の目的で、一六〇九年の初期のころ(ガリレオ以前でさえ)望遠鏡を使っていたかもしれないのである。そして最初の複合顕微鏡が一五九〇年くらいにオランダで開発されていた。『蚤』についての議論の中で(わたしの本の百三十三頁)、「顕微鏡の作用」としての考え方に言及している。

しかし、その詩は「目による」ことを「触れることのできる」検証に置き換えることなど示してはいない。ダンの蚤は見られると同時に触られる存在である。さらに、ダハティのその詩の理解は問題があるように思われる。「生きている黒玉の壁」への言及は、ダハティによると、蚤が「息を吸ったり、吐いたり」していて、そのことが「蚤の大きさを曖昧にしていることを意味している」というのである。さらに、その蚤は、血を吸って膨らみ、「詩の中の話し手の膨れ上がったペニスに驚くほど類似して」いるから、その呼吸が「男根の膨張と収縮の繰り返しを暗示する」ことになる、という。

これは、男根の生理学についてだけでなく、蚤の呼吸作用の体系についても無知を晒け出しているようである。蚤は、ダハティがきつとそうだと想像しているように、膨張したり収縮したりして、息

その後1990年

を吸ったり、吐いたりはしないのである。肺を持っているのではなく、胴体の両側にある穴（気門）を通して空気を取るのである。その気門によって毛細管体系に直接送り込まれる。もちろん、ダン自身も蚤というものは、哺乳類のように呼吸すると想像したかもしれない、とダハティは言うかもしれないし、あるいは顕微鏡（望遠鏡）を通して蚤を見れば、こんな風に観察したと想像したかもしれない、と言うかもしれない。しかし、私たちがその詩に立ち返ってみると、その蚤の膨れ上がる呼吸というのが、実際にはダハティが創り出したものであることが分る。ダンはただ蚤が「生きている」と書いているだけである。結局のところ、息をする蚤のようにリズムカルに膨張したり、収縮したりするダハティの男根の光景はダンのものとは言えない。

ダハティがこの詩を読みながら感じていたことは、ダンが望遠鏡を実際持っていたかもしれないし、「この道具を使ってここで彼が『玩具にしている』イメージを示す価値がある」ということである。望遠鏡の筒は、一方をもう一方に入れるので、「男根が目的を精一杯果たそうとするその動きを示す一つの予告になっている。」望遠鏡と男根の類似性が「ダンにとつて重大で」（同五十六―七頁）あった。ここでダハティがイメージしていることの有効性が何であろうと、彼のポスト構造主義理論がテクストの背後に「ダン」を描こうとするどんな企ても拒否することからみれば、明らかに相容れない。またしても彼の理論からの実際の応用はひどくなる。

ポスト構造主義という転位は彼の本全体に広がっていて、それが知的一貫性に対して持っていたかもしれないどんな主張をも無効にしている。彼が提案している読みは、気紛れな軌道に沿って逸れていく、しかし、一方ではダンの「歴史的瞬間」に対して忠誠の誓いを

残している。時々、この読みはまったくの気紛れのように思える。（彼が『別れ：窓ガラスに刻んだぼくの名に』の中で提案するとき、「岩」（六行）という単語がキリストの墓への言及であるから、刻まれた名はイエス・キリストであり、ジョン・ダンのではない、と読むように。）またある時には、この読みはダハティがダンの精神をダンの書物の中で表現されたものとして間違つて読むことよって導き出されているように思える。例えば、私たちが見てきたように、ダハティはダンが気紛れと不倫と言えば女性を連想したと信じている。確かに詩の何編かはこれを連想させる。しかし、全体として、気紛れについての詩はダハティが以上にもつと変化に富んでいるし、時々、女性といえは堅実を連想させるくらいである。その点に関しては『別れ：嘆くのをやめよ』がある。

お前が堅実であれば、ぼくの円は正しく描かれ

ぼくは出発したところに、戻ることができる。

（三十五―十六）⁴

ダハティは、これらの詩行がいままでいつも解釈されてきた意味を認めることで、はじめてダンが徹底して気紛れと不倫を女性のものとした彼の信念を棄てることができる。すなわち、ダンの時代は女性を恥ずべきものとして扱ったということを示そうとする彼の願望に結び付いている信念である。結果として、彼はやむを得ずこの詩行の明確な意味を否定しなければならなくなり、別の意味があるようにみせかけた。その詩行は、その詩の話し手が男性か、女性かはつきりしないから「徹底的に曖昧」である、と彼は主張するのである。

もしその詩が全体として男性によって話されると考えるならば、その時、ここで性的提示はその関係を同性愛となるように作り始める。相手の男根の堅固さが男性の話し手の「円」を丁度にする。、、この円は肛門となり、擬似女性性器として使われる。
(同七十五頁)

しかしながら、ダハティは「これらの読みがあまりに不自然すぎるように思えるかもしれない」ことを認めて、一つの代案を提示する。

「この時点で話し手の性が変わる、と言うのが適切である」と彼は説明する。(すなわち、その詩の最後の二行の丁度前で)最後の二行は男性ではなく、女性によって話されると想像することになる。その女性が仄めかす堅実さは「直立した男根となり」、その円は「女性器となる」。そして、「戻ること(最後)」は「その女性のオルガスムとなり」『わたしの出発したところ』——すなわち『わたし』がその女性の子宮、生殖器の中で生まれたところ——に戻ることができる。

ダハティが、彼の考える女性応答者のために提案する弁明は思维的にその詩を再構築する。この時点でその詩は、それ自体話し手のかなる変化も示してはいないし、その想定される女性の奇妙で突然の卑猥さは男性の話し手が「洗練された」魂の愛を強調していることとは著しく調子がずれている。これが、ダハティが論ずるように、「適切な」読みだとすれば、一つの意味が不適切だと述べるために、どれほど信じられないようにしなければならぬのだろうか。

ダハティが読みについての「気儘な遊び」理論に賛同しているとすれば、もちろん彼が提案する意味は間違っているはずはない。なぜなら、このような理論の機能はあらゆる制限から意味を解き放つことであるからである。しかしながら、私たちが見てきたようにダ

ハティはこの様などんな自由も提案してはいないのである。彼が宣言する意味についての基準は歴史的事であることである。彼は、意味することがダンの「歴史的文化」と同時に起こる基盤の上での意味を提出する。しかし、彼が提案する新しい意味がダンやダンの同時代の人々に起こったであろうとか、起こったはずであることを示そうとするつもりは全くないのである。これを示すことができないならば、これらの意味がダンの歴史的文化に繋がっているという主張は意味がない。

根本的な疑問は、ダハティの読みの実際が、巧妙さと気紛れによって大きく左右されるとき、何故ダハティはダンの歴史的文化に忠誠を誓ったままなのか、である。それは、ダハティの本の大部分を含むことでもあるが、本当にダン研究のためではなく、解釈についての現代の議論の全体のためとか、文学の学問的研究と解釈との関係のための意味合いを含む疑問なのである。なぜなら、ダハティが、読みの気儘な遊び理論は、学問的研究としての読みが可能であることを無効にしてしまうので歴史的主張を残しておくのだ、といっているように思えるからである。意味に対する全ての制限を取り外すことで、結果として気儘な遊び理論は意味をなくす。すなわち、意味は制限があるからこそ存在するからである。(いわゆる言葉は、それ自体を越えた他の意味を排除することで意味を持つのである。)排除が許されないなら、意味は結局無限になってしまう。学問的であれ何であれ、意味についての議論は論点を無くす。なぜなら、解釈は果てし無い幻想によって無効にされてきた。バルトが述べるように、『ひとたびその作者が取り除かれると、テキストを解釈すべきその主張は全くの徒勞となる。』⁴⁾

それゆえ、学問の内側で(そこはダハティと彼の本が存在してい

その後1990年

るところ)で読みの活動を続けるために、確かめることのできると思われている何か、すなわち、歴史のようなものに、読みを結び付けたら、少なくとも結び付けることを宣言することは必要である。西洋の文化の慣習の中で、幻想は学問(歴史がそうであるが)として認められない。ダハティは意識するとしなやかにかかわらず、自分の本が歴史に貢献していることを主張することでこの状況に順応してきた。と同時に、彼の読みの実際は、いかなる学問的な意味でも、歴史的基準に答えることはできていないし、彼の本は従って啓蒙と警告的な方法でそれ自体を脱構築しているのである。それは、「歴史」からの撤退と現代文学研究の特徴である「歴史」への帰還を描いている。しかし、それはただよろしからそうしているのである。なぜなら、その本の描く歴史が不明瞭だからである。

この点に関して、アーサー・マロツティの本は、同じような一般的な動向を描いているが、驚くべき対照を提示している。ダハティの曖昧さと比較してみると、マロツティの扱う歴史は、正確で厳密に焦点が合っている。「ルネサンス」思想についての古い型の考察に代えて、彼は、例えばエセックス伯が没落した(マロツティの本の百二十八―三十三頁)時のエリザベス女王の法廷における派閥争いの詳細を提出する。その没落が、ダンの「靈魂の再生」についての政治的読みを(そのように認めているだけかもしれないが)正当化することも出来ない。

マロツティの一般的な目的は、いかにダンの詩が、社会経済の状況と友人たちの小さな群れの審美的先入観に影響を及ぼしているかを示すことにある。その原稿の回し読みは、友人たちに限定されていた。ダンの人生の異なった段階で、彼がリンカーン法学院からエジャーントンによる雇用、ベッドフォード伯爵夫人の庇護へと転々と

したように、この群れの構成員は変化したり、マロツティが論ずるように、ダンの書く物はそれに伴って変化したのである。詩は、この点で社会的所産であり、マロツティが論ずるように、ダンの現代の読者は文学作品としてよりむしろ仲間内の社会時評として詩を見ることに馴染まなければならない。

マロツティが、社会的要素を強調することはダンの個性を否定することを意味しない。彼は「自己」が妄想であるとか、ブルジョアの幻想であるとかというポスト構造主義の仮説に反対する。そうではなくて、彼は、作者の個性を、それを取り巻くその文化と環境に結び付ける必要があることを強調する。従って、彼の理論と方法論は、ダハティには無い一貫性があり、彼は、自分が主張する批評的立場を覆すことなしにダンの心理を読み取るうとすることができる。もちろん、ダンの詩を一つひとつ社会的状況に合わせることは、その状況が復元可能である限りにおいてのみ可能である。書簡詩を扱うマロツティの手順は、滑らかに運ぶ。なぜなら、書簡詩の日付と受取人が、たいてい特定でき、それに伴いその社会環境が再構築できるからである。初期の諷刺詩と悲恋歌は、この点に関しては問題があるのだが、無難なところを言えば、ダンの法学院修学時代に位置付けることができる。このことも、詩が取り扱っている貞淑と好色の姿勢に暗示的に関連付けることのできる社会経済の状況の中に置くことになる。

しかし、『ソングズ・アンド・ソネット』は、マロツティの研究に比べてさらに厄介なことになり、彼は自分の本が持っている説得力を学問的に駄目にしてしまう仕掛けの考察に頼らざるを得なくなる。もちろん、彼はその困難さに気付いている。彼が指摘する(同十六頁)のは、『ソングズ・アンド・ソネット』からの詩が、十七世紀

の手書き原稿の中で比較的稀にしか出ていないということである。そのことは、ダンが、その回し読みを制限していたことを示している。さらに、グッデイヤーに宛てた一六一一年の手紙で、ダンは、自分の作品が何編か知らないうちに、「世間にこっそり出て」行っていたものもあり、彼が同意して回し読みされたものもあつたが、「貧弱な」ままであつた何編かがあつて、その点で、彼はそれらを書き写すのを許可しなかつた、ことを述べていた。このことから、マロツティの基本的な命題にもかかわらず、ダンの作品が全て適切に同人仲間の産物として研究できるわけではない、ということになる。確かに、詩の何編かは実際のところ私的叙情の発露であり、読者は伝統的に、考えもせずに詩とはそういうものだと思ひ込んでいた節がある。ウエストモアランド手書き原稿からの一編（『贈られし黒玉の指輪』）を除いたダンの全ての『ソングズ・アンド・ソネット』が脱落しているのも、これらの叙情詩の特別に私的な個性を暗示しているかもしれない、とマロツティは付け加える。だから、それらの詩は、その手書き原稿を持っていたロウランド・ウッドワードのようなごく親しい友人の所有にさえならなかつたのである。

しかしながら、マロツティが主要な仮説についてのこれらの事実を正確に記載することで、『ソングズ・アンド・ソネット』を論じる時期を、見失つてしまつた。事實は、最も仮説的なものについてさえ、内的であれ、外的であれ、いかなる証拠も、これらの大部分の詩の日付けのためには存在しないのである。二・三編の中には『聖列加入式』のような明らかにジェームズ一世に言及することで、一六〇三年以後の日付けを暗示することもある。しかし、それは別にして、ダンの生涯の特別な時期、結果として特別な社会的情况に、その詩を置くことは、全くの推測の域をでないのである。

マロツティは、『共有財産』、『愛の制限』、『女の貞操』などの叙情詩を法学院の時期（同七十四頁）の作品と見なしている。『愛の神』、『遺言』、『花』などの詩をダンがリンカーン法学院に居住した時とアン・モア（同百六頁）と関わりを持った時との間の時期に属するものとした。また『砕けた心』を含む他の詩を結婚前のアン（同百三十八頁）との時期と同時代であるとする、など。しかし、これらの位置づけは、厳密には虚構である。いかなる証拠も支持しない。実際のところ、ダンが法学院時代の間に、あるいは、その事柄については、アンとの結婚以前に『ソングズ・アンド・ソネット』のいずれかを書いた、などと論証できないのである。そして、詩の中にある日付けに対するこのような不十分な手掛かりでは、ダンが書かなかつたことを示すことになる。個人的な『ソングズ・アンド・ソネット』が同人仲間に強制されて作られたことを示そうとマロツティが繰り返し用いる議論は、回し読みである。特定の詩の特徴は、彼が私たちに告げるように、ダンがそれを書くとき、この仲間あとの仲間を心に描いていたことを示している。このことは、この人あの人、その特徴を選ぶことも決めていたことを証明する、という。このような論の立て方は、論証可能であると見なされるかもしれないものとの繋がりを帳消しにしてしまう。

何編かの詩に係のある要素は、ダンが妻の名前モアに関して使う語呂合せである。これは彼女の死⁵でも、どうしても愛を乞わねばならぬのか⁵に關してのソネットの中では間違えようが無い。そして、そう『離別—窓ガラスに刻んだ僕の名に』⁶の中で、「もつともなことにガラスはお前にお前を見させてくれる。」とダンが反射するガラスに言及することで、その詩はアンを連想させる。アンの名前が、もつともらしさを伴つて読み込まれる他の詩は、『砕けし心』、

その後1990年

『愛の成長』、『愛の無限』、『離別—嘆きによせて』がある。しかし、明らかに無理はある。『寝にくる彼の恋人に』は、最後の詩行「君は男を身につければもう服などどんな必要があるんだい」を頼りにアンと結び付けられるのであろうか。もしそうでなければ、どのようにして「モア」の意味があるのと意味がないのとを区別するのであろうか。アンの名前が表れるときですら、当然のこととして、その詩に「事実」すなわち自伝的なものを伝える必要はない。なぜなら、彼女は、他の彼女たちのように、疑いなくダンの生活を共有しているだけでなく、彼の幻想の世界に住んでいたからである。

アンの名前がでることは、その詩が彼女の「ため」に書かれたことを意味する必要は全くないであろう。「私が信じているのだが」とマロツティは「ダンが愛した女性のために叙情詩を書いたときでも、男性の同人読者との付き合いを決して断たなかった」と解釈する。従って「アンと男の友人たちのための二重の聴衆を前にしての演技か、または男の聴衆だけに向けた作品（同百三十九頁）かのどちらかとして、相思相愛の詩を見ることは意味がある。」もしマロツティの言うことが正しければ、アンの名前は、読者の立場を決定するのに役に立たない。だが、実際のところ、彼の議論が、ここでは偏見の記述以外の何物でもないことになる。どちらにしても、証拠は利用できないのである。ダンはアンのためだけに詩を書いたかもしれないし、また「仲間たち」のために書いたかもしれない。しかし、マロツティが言うそのために『ソングズ・アンド・ソネット』が創作されたというその仲間たちが、最終的には、想像の域を出ていないのである。

詩の中にアンの名前が出てくることは、解釈するのが難しいことを認めるが、少なくとも明確な一つの証拠のように見える。マロツ

ティが、あまりに自らの想像力に富んだ先入観に捕らわれすぎて、その意味するところを無視してしまっているのは興味深いことである。「解体」は、一人の婦人の死についてであるが、彼が認めているように、必ずと言って良いほど、その最後の詩行にアンの名前の語呂合せがある。「……その火葉がもつとあれば」そのことは彼女の死が、その詩の誘因になったことを暗示している。これは、その日付けを一六十七年とする。しかし、マロツティは、その詩を「ペトラルカ風の決まり文句と詭弁的理由づけを利用した自意識過剰の機知に富んだ演技」と読み、従って、その詩を「妻の死（同二百三十二頁）に際しての聖職者ダンのとった態度であると連想するのは難しいであろう」と決めつけている。ここでマロツティの理由づけは、聖職者についてとダンが男性仲間の聴き手のために書いているときだけ機知に富んでいたというあまりにも安易な仮説についての先入観があるだけである。事実、その詩の機知の使い方は、単純に陰鬱で自己陶醉と読める。何はともあれ、ダンが、自分自身のためか、それとも聴き手のために書いたのか、普通決定することは簡単には出来ない。

マロツティが、『ソングズ・アンド・ソネット』の数編をベッドフォード伯爵夫人と結び付けているのは、同じように疑問が残る。ダンの支援者としての彼女の役割を歴史的に調査しているのは、極めて一貫性があるし、綿密である。しかし、二人の関係の特徴と親密さとなるとはつきりしないままである。マロツティは、ダンが彼女のために『トウィックナム・ガーデン』、『空気と天使』、『埋葬』、『熱病』を書いたのだ、と信じている。（同二百一頁）しかし、これらの詩の最初だけは確かに伯爵夫人（この本の六十四—六頁を参照）に関連づけられるし、それさえ、彼女の「ため」ではなかったかも

しれない。その点で、ダンには、彼女にそれを見せる危険を冒さなかつたかもしれない。『熱病』の中の女を肉体的に渴望するのは：

このほくだつてお前を一時間たりとも所有したい、
他の全てを永遠に所有するよりも。

(二十七—八行)^[9]

無職の一人が、一人の貴婦人にあえて言うことのできた事柄をはるかに超えているように思われる。もしもダンが、こんな風に開けつひろげな欲望の表現を用いて伯爵夫人に迫つたとしたなら、なぜダンが、夫人に送つた高潔な書簡詩の中にこのような感情の暗示が一つもないのか。しかし、それゆえに、マロツティは(叙情詩に共鳴する読み手ではないようだ、言われるに違いないが)『熱病』を「情熱のない論理的演技」(同二百二十二頁)である、と考えている。そこで、たぶんその不調和が、彼を感動させないのである。

宗教詩の場合、読み手の立場に関していくつかのより確固たる証拠が利用可能だし、マロツティは、それらを上手に扱っている。『ホーリー・ソネツ』は個人的な心理葛藤(同二百四十五頁)に関連していたことは疑いが無いが、彼は、ダンが自ら支援してくれる人を得ようと精神的傷跡を晒しものにした、ことを強調している。ソネツの内編は大膽におもねつた序のソネツ付きで浪費家で若いドーセット伯爵へ送られた⁵⁾。これらの詩と他の聖職につく前の宗教詩は、このように「私利に穢されて」(同二百五十一頁)いた、とマロツティは論ずる。実際、ともかくこれらの詩を作った時、ダンには、移り行く社会文化の情況に野心的に応えようとしていた。自ら宗教詩を書き、敬虔な詩作を好んでいたジェイムズ一世が、王位

に就いたことで、宗教詩を作ることは、一つの政治的な振る舞いとなつた。(同二百四十六頁)

マロツティが、ダンの自己宣伝と就職運動に『ホーリー・ソネツ』を結び付けることは、高度に暗示的で、詳細である。『私の心を破城槌で打ってください』の中で、彼はジェイムズ一世時代の状況に合わせた奇抜さとしての同性愛の凌辱(「ずつと穢れのないままにせずに、ただ私を凌辱してください」)の弁明だと読み取る。ジェイムズ一世が、同性愛者で気に入った男に権力を行使したことが、文化的基盤を創り出した。そこで、その詩の同性愛の提起が、王様(ここでは神様)の好み(同二百五十九—六十頁)を勝ち得ることと同じことになりえる。このことは、ベッドフォード婦人と『熱病』を結び付けるよりも、もつと説得力があるように思われる。なぜなら、歴史的な脈が、さらに限定されるからである。また、それなしにはマロツティの理論も成り立ち得ないのである。ジェイムズ一世の同性愛は、知られているが、ダンのベッドフォード婦人との正確な関係は知られていない。

しかし、基盤としてこの程度の確かさを持っていても、仲間意識を再構築するのは、そのあらゆる制限と口にされなかつた理解を考えると、恐ろしく難しい仕事のように思われる。すると、マロツティの『私の心を破城槌で打ってください』の挑戦的読みが、疑わしくなってくる。例えば、ダンが(もしマロツティが正しければ)荘厳かつ神聖に男色に反応するその詩の男性仲間の読み手を、念頭に入れることができるはずであると言うのは、奇妙に思える。なぜなら、手始めにその同じ(宮廷の)読み手のために書かれ、ジェイムズ一世に提出された『偽殉教者』の中で、男色は、特に教会という文脈の中では、救いのない嘲笑をもって扱われている。まるでダン

その後1990年

が、嘲りと嫌悪(同二十一頁を参照)を持ってその主題に反応する読者を想定しているかのようである。充分に知れ渡った性的好みを持つていたジェイムズ一世が、この一文にどんな反応をしたのかは別問題である。

しかし、マロツティが企てたことで起こってくるどんな疑念も、ダハティが、文学を歴史に結び付ける企ての中で起こした疑念に比べれば、はるかに成功しているのは明らかである。ダハティは理解していないようであるが、マロツティは、作者の死を標榜するポスト構造主義が、このようなどんな歴史的研究と比べられないことも理解している。なぜなら、ポスト構造主義は、歴史的テキストに頼って読むことを排除するからである。ポスト構造主義の原理的な主張は、議論の余地がない。実際、私が提示してきたように無内容な陳述なのである。論争の余地がないのでその主張は、かたんに論拠と間違われる。真実への勇氣は、満足のいかなない推測という文学批評の荒野からポスト構造主義の主張へと逃げ込みたくてしようがない。(マロツティの本の多くの部分が引用される荒野である。)

しかし、その論拠の中で、解釈は効力をなくし、文学批評は、立ち行かなくなる。ダハティの本は、このことを物語っている。とにかく批評を押し進めるためには、その理論を放棄しなければならぬ、ということである。驚くべきことではなく、英文学研究の現代の潮流は、「理論」から離れ「歴史」へ帰っている。だから、「ニュー・ヒストリシズム」の台頭は、指摘されてきたように、全体としてその素材を古い歴史主義の学問的業績に頼っている。マロツティは、単なる推測にあまりにも頼りすぎているが、彼と他の現代のダンの歴史主義批評家たちは、少なくとも、文学研究がそれに終止符を打つ理論の恐怖を切り抜けることのできる一つの道を示すことは可能

なのである。

原注

- (1) Thomas Docherty, *John Donne, Undone* (Methuen, London and New York, 1986), and Arthur F. Marotti, *John Donne, Coterie Poet* (University of Wisconsin Press, Madison, 1986).
- (2) In Roland Barthes, *Image-Music-Text*, essays sel. and trans. Stephen Heath (Fontana/Collins, London, 1975).
- (3) See Roland Barthes, *S/Z*, trans. R. Miller (Jonathan Cape, London, 1975).
- (4) Barthes, *Image-Music-Text*, 147.
- (5) *Divine Poems*, 5-6.
- (6) See Leath Marcus in 'The Muses Common-Weale', *Poetry and Politics in the Seventeenth Century*, ed. Claude J. Summers and Ted-Larry Pebworth (University of Missouri press, Columbia, 1988), 207-10; also Keith Thomas, *History and Literature* (The Ernest Hughes Memorial Lecture, University College of Swansea, 1989).
- (7) See For example the essays in *The Eagle and the Dove: Reassessing John Donne* ed. Claude J. Summers and Ted-Larry Pebworth (University of Missouri Press, Columbia, 1986).

訳注

- [1] ション・ケアリ(一九三四〜)
- イギリスの学者・批評家。オックスフォード大学卒。一九七六年へレン・ガードナー女史の後任として、同大学マートン・カレッジ英文学教授となる。第十七世紀の詩ヴィクトリア朝の小説に造詣が深

く、ディケンズ論 *The Violent Effigy* (一九七三) サツカレイ論
Prodigal Genius (一九七七)、『ジョン・ダンー生涯、精神、技法』

(一九八一) は学界と文壇に大きい反響を呼んだ。ほかにミルトン
 注釈(一九六八) そのほかがある。歴史的立場を堅持しながら、心
 理学的な見地もとり入れた批評方法が特徴。一九八二年来日、日本
 英文学会のために特別講演。(英米文学辞典第三版、研究社) ここで
 翻訳したものは『ジョン・ダンー生涯、精神、技法』(一九九〇年
 版)の最後の章であり、この章は一九九〇年に加筆されたものであ
 ります。一九九〇年の九月十日に翻訳の許可をお願いしたところ、
 すぐ九月二十六日付けで快く認可する旨の返事をいただきました。

[2] 『ジョン・ダンー生涯、精神、技法』(一九八一) 出版。

[3] Shine here to us, and thou art every where ;

This bed thy center is, these walls, thy sphere.

(‘The Sunne Rising’, ll. 29-30).

[4] Thy firmnes makes circle just

And makes me end, where I begonne.

(‘A Valediction ; forbidding Mourning’, ll. 35-6)

[5] ‘But why should I begg more love’

[6] ‘Tis more, that it shows thee to thee’

[7] ‘What need’st thou have more covering than a man?’

[8] ‘……the powder being more’

[9] I had rather owner bee

Of thee one houre, then all else ever.

(‘A Feaver’, ll. 27-8).